

御瀧神社

祭神

水波能売命(みずのはめののみこと)
日本武尊(やまとたけるのみこと)

館山市大賀字曾根三八九



庚申講青面金剛石像
享保十二年(1727)



山王大権現の石碑
万治二年(1659)



- 宮司 酒井昌義
- 例祭日 八月一日
- 境内神社 稲荷神社
- 境内坪数 266坪

由緒

御瀧神社の創建は、昭和三十五年まで境内にあった黒松の巨木が樹齢二百数十年といわれています。境内には、江戸時代初期に創建されたと思われ、江戸時代初期の山王大権現の石碑や、庚申講青面金剛石像が今も残され、歴史の深さを物語っており、昔から農業や漁業を営んできた村人たちの篤い信仰心が根付く歴史ある神社です。

8/1・2 館山のまつり

祭りの起源 大正三年、旧館山町(現在の青柳、上真倉、新井、下町、仲町、上町、楠見、上須賀地区)と、旧豊津村(現在の沼、柏崎、宮城、笠名、大賀地区)が合併し館山町になったのをきっかけに、大正七年より毎年十三地区十一社が八月一日・二日の祭礼を合同で執り行うようになりました。その後、大正十二年の関東大震災により、諏訪神社(下社)、諏訪神社(上社)、厳島神社、八坂神社の四社が倒壊したため、協議により各社の合祀を認め、昭和七年に館山神社として創建されました。

自慢の祭

大賀区の祭礼は氏子役員を頭に青年会を中心として、区、常盤木会(六〇歳以上)、中高生など百人からなる区民と、南房総市千倉町から応援にきてく



館山神社拜殿へつける御瀧神社神輿

れる谷津青年会や自衛隊の方々などの多くの参加者で毎年盛大に執り行われています。祭礼が近づく子供から大人まで一緒に「木遣り」と「二〇程」の練習が行われます。

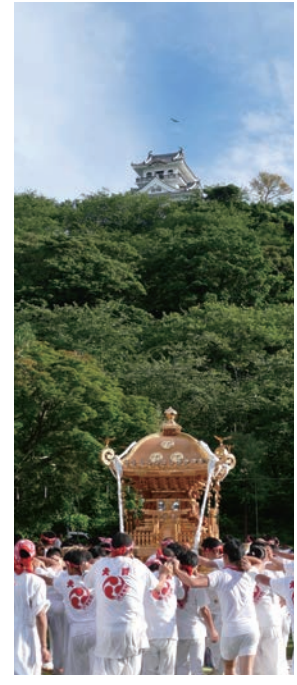
最近では女性も唄うようになり、「神輿唄」で足並みを揃えることが伝統になっています。

例年七月三十一日の祭典で神輿御霊入れの儀式を行い、八月一日の「館山のまつり」に出祭します。

一日の午前中には子供神輿である「小神輿(こでん)」が近隣の里見区や地元を渡御し、子供同士の交流の場と共に元気な声が響き渡ります。大人の神輿は昭和三十二年に地元大賀の「孫平」という大工によって作られた「中神輿(ちゆうでん)」でしたが、現在は区民の熱い願いを込めて平成二十年に竣工した三尺八寸の自慢の「大神輿(おおでん)」が担がれています。

合同祭礼では出祭する十三地区の中で、昔から一番初めに館山神社入祭をしています。担ぎ方は前を高くするのが特徴で、近年では女性の担ぎ手も交え、「神輿唄」で足並みを揃えての威勢のいい渡御を行います。

八月二日には青年会主体で平成二十五年に修復された「中神輿(ちゆうでん)」を出祭し、柏崎、笠名との三地区による「懇親祭」を行っています。大賀の御瀧神社に集合した後、笠名の神明神社でゆっくりと親睦を深め、柏崎を送る際には宮城の坂で、大賀、笠名の仲間も一緒に綱を握りお舟を引きます。名残惜しさを噛み締めながら友情を確かめ合う二十年も続く大切な行事となっています。



現在は館山十三地区八社として、神輿七基、曳舟二基、山車四基がそれぞれの地区から出祭しています。愛称「たてやまんまち」として、城下の人々によって伝え続けられてきた「心のまつり」です。



御瀧神社
揃いのタオル
神輿を新調できたという地域の絆を重んじながら、皆が一体となって伝統を守り継ごうという熱き心意気の溢れる自慢の祭りです。



館山神社境内での威勢のいい揉み差し